紅一点カリスマ・フェメイル・ヴォーカリスト
Anzaを擁する“HEAD PHONES PRESIDENT”
2年ぶり4枚目となるフル・アルバム『Disillusion』渾身のリリース！！

Anza (Vo)　Hiro (Gt)　Narumi (Ba)　Batch (Dr)

ー前作から2年という間隔で今作『Disillusion』が完成しましたね。今作は制作が遅れていたというお話を小耳に挟みましたが実際のところいかがでしたか？

Anza：本当はこのアルバムは去年出す予定だったんです。去年はOZZFESTの出演機会もあったので、そのタイミングで出したかったんですけど、『Stand In The World』を超えるものを！という思いが頭から離れなくて産みの苦しみがありましたね。私自身のことですけど、前作を作ったあとに創作意欲がなくなって……燃え尽きてしまったというのが本音で。前作を超えるものが全然降って来なくて。同じことをしてもつまらないしって考え込んだりなかなか前に進めなかったんです。

ー楽曲は早い段階では完成していたんですか？

Hiro：なるべく早く出したかったので、結構早いタイミングで着手はしてました。今まで5年とか普通に開いちゃってたんで、そういうイメージを変えてもっとコンスタントに出せるバンドになりたかったんで。曲作りは早い段階でやってたんですけど、前作の完成度にみんな満足していたので、その分自分たちでハードルを上げてしまって、並みの曲では満足できなくなってしまったんですよね。以前だったら“あ、この曲いい感じだね！いけるよ！”って進めていたものでも今作では“これじゃあフックが足りない”って、どんどんボツになっていって。そのプレッシャーに苛まれて、今度は全くアイデアが思い浮かばなくなっちゃって……。そういうところもあって2年かかってしまいました。

ーボツにした曲も多かったんですか？

Anza：今までで1番多かったですね。
Hiro：Anzaからいろんな情報が来るんですよ。今はこういうのが主流だとか、市場調査に余念がないんですよ（笑）。“シンセの同期にヘヴィなリフが絡んで、こういうのが今人気なんだよ”とかそういう情報をくれるんですよ。で、“なるほど、こういう要素が流行ってるのか、じゃあHPPにこういう要素を取り入れてみよう”と、いろいろ曲を作ってみるんですけど、やっぱり急にそういうことをしてもフィットしないので、現代の流行のテイストを取り入れつつ、今までのコアな部分を残した曲を作るのに時間がかかりましたね。

ー馴染ませるというか、現代の流行のテイストに寄り切らず、自分たちの音を残しつつということですよね。

Hiro：あまり現代の流行のテイストがメインになってしまってもバンドとしての説得力がなくなってしまうし、すべて排除してしまっても時代にフィットしないし。新しいファンを開拓することも大事ですし、できるだけたくさんの人に聴いてもらいたいというのは前作からのテーマだったので、そこはこれからも継承してやっていきたいです。

ー楽曲について伺いたいのですが、まずTrack.1「The One To Break」ですがまさに新しい作風の楽曲の1つだと思います。今までのAnzaさんのクリーン・ヴォーカルの哀愁も残しつつ、リズムもノリやすく、良い意味でニュートラルな楽曲だと思いました。ある意味、次のHPPのフェーズにも繋がっていくように感じるのですがいかがですか？

Hiro：この曲は2013年の1月ぐらいから着手し始めた曲ですね。そこからずっと温めていて、今作の中では最初の方にできた曲です。Anzaからヒントをもらって、ギターのアプローチも今までとは変えました。あとシンセ・ベースとかピアノの音も入れていて、実験的な感じの曲です。テンポもノリが良くて、ドラムの四つ打ちがゴキゲンなサウンドで、ポップになり過ぎず、どこまでエッジを残せるかってテーマで作りました（笑）。この曲は自分の中では“全部入り”なんですよね。モッシュ的なパートもあって、ギター・ソロもあり、全部入ってるんだけど、コンパクトに3分30秒ぐらいでまとめてます。すんなり聴けるけど、意外と複雑で凝った作りになってて、そういう部分で差別化を図りたいんです。普通にやると“あ、ポップになっちゃったね”ってなるので。

ー同期の使い方も前に出すぎず、楽器隊をちゃんとメインに立てているので、いい塩梅で抑揚が付いていますよね。ちなみにこの曲がMVになりましたが、この曲をMVに選んだことはメンバーみなさん満場一致で決まったんですか？

Anza：実は最初はTrack.3の「I Mean It」と悩んでたんです。曲のキャッチーさという意味ではTrack.1の「The One To Break」の方がキャッチーなんでMV向きかなと思って。2本目のPVをもし撮ることになれば「I Mean It」になると思います。

ー「I Mean It」は実験的でありつつ、HPPらしいNu-Metalテイストも残ってますよね。

Anza：Hiroからこの曲が来た時に、HPPの新機軸だと思いました。HPP特有のダークな世界観の曲がなくなることはまずないと思うんですけど、そんな中においても新しいことができるようになったのかなって思います。そういう意味で今までの曲とは少し違いますね。

ーTrack.2の「A New World」は今作の中では1番荒々しい曲ですね。あえてスラッシーな粗野な荒々しさを残しているのが伝わってきます。また荒々しさの中のサビのキャッチーなメロディが際立っていますね。

Anza：そうですね。伸びのあるサビがいいなってずっと思ってて。なかなかそれって自分の中で100%フィットさせることができてなくて。特にこういうスラッシーな曲って、今まではスラッシーな要素はあっても、ここまで振り切った曲は初めてで。今までの作品ではメロディは全部書いてきたんですけど、今回は新しい要素を入れるにはメンバーからのアイデアも必要だから、Anza節を捨ててみようと思って結構メンバーに投げたんですよ。それで返ってきた良いものを取り入れていった感じです。

できるだけたくさんの人に聴いてもらいたいというのは
前作からのテーマだったので、そこはこれからも継承してやっていきたいです

ーなるほど。この曲は良い意味でコントロールされてる曲ですよね。スラッシーで荒々しく、破天荒に向かっているように見えつつも、きっちりとサビで落とすというか。

Hiro：こういう速い曲調って前からチャレンジしたくて、でもやっぱりやってみると難しいんですよね。バンドのコアな部分、HPPらしさがどうしても薄れてしまうというか、諸刃の剣なんですよね。ありがちなメタルの曲になるか、HPPのコアを残しながらフックのある曲になるのかっていう、そのギリギリの調整が難しかったですね。タフな感じのテイストのままずっと行くと古臭くなっちゃうし。なのでサビ以外のAメロ、BメロとかはタフなイメージでPhil Anselmo（PANTERA、DOWN etc）をAnzaが歌ったらどうなるのかな？って感じで。今までは音楽的に言うとブルー・ノート（※ジャズやブルース などで使われるメジャー・スケール（長音階）に、その第3音、第5音、第7音を半音下げた音を加えて用いるもの）を多用したメロディってあんまりなかったんですけど、タフな感じを出したかったからブルー・ノートを入れた雰囲気のメロディをAメロ、Bメロに入れて、サビは思いっきり突き抜けさせた感じですね。メリハリも出せたし、スピードもダブル・ベースやハーフ・テンポになったりしつつ場面を変えていってまとめた曲なんです。当初ギター・ソロの部分もずっと突っ走ったままの感じだったんですけど、どうしても普通のメタルになっちゃうので、思い切って逆にドゥーミーな感じにして、ものすごいスロウなパートに落としたアレンジに変えたりして、なかなか面白い感じに仕上がったかなと思います。

ーこの曲を挟んでTrack.3「I Mean It」が来るのも面白いなと思いました。この3曲目までは解放的な雰囲気で、4曲目から大きく方向性が変わってきますね。この意見は狙いどおりですか？

Anza：そうですね。ただ、曲順を決めた時、私はTrack.4の「Breeze」はこの位置に置く予定ではなかったんですけど、レーベル担当から“早くこの「Breeze」を聴かせたい！”って意見が出たので（笑）。“いいんじゃない別に4曲目でも”って。さらに最初はこの曲をMVにしようという話も上がっていて（笑）。どちらかと言うと今までのHPPらしい曲ではあるんですけど、実はメロディ・ラインは結構冒険してるんです。サビのメロディの付け方は今までにはない感じですね。いつも低いキーからいくんですけど、今回は自分のギリギリの高いキーのところまで突っ走ってるんです。メロディがパッと早く浮かんだのはこの曲だけですね。あとの曲はかなり難航しました。

ーこのTrack.4からTrack.5「Wait」～Track.6「Miss You」と沈み込んでいくイメージの曲が続くなと思いました。Track.3までのアガって行く雰囲気に対して、その後ダーク・サイドが続くというか。更に言うとTrack.7「Dance With Shadows」のチルアウト・ミュージック的なトラックを挟んで、Track.8「Far Away」以降はダークだけでなく怒りや憤りが加わってくるなと。

Anza：まぁウチからしいですね（笑）。ライヴでも前半は明るいテイストのものをやって、最後はなんとも言いがたいダークな雰囲気で終わるということがよくあります（笑）。ただそこまで曲順は気にしてないんです。でもみんな違う曲順を言ってきたんで揉めましたけどね（笑）。

ー話は変わりますが、歌詞に関して今作で意識したところは？

Anza：歌詞の部分でいうと今作では本当の意味でダークなことは全然言ってなくて。どちらかというと、より身近なことというか、人生初の私なりのラヴ・ソングも入ってますし（笑）。

ー歌詞も“あなた”に対して訴えかけるものが多くなりましたよね？

Anza：そうですね、相手に対して歌うものが多くなりました。ダーク・ソングとは言ってても、怒ってる曲はありますけど、昔みたいなネガティヴなものではなくてポジティヴな感じでまとまりましたね。

ー個人的にはTrack.5「Wait」が好きなんですが、ギターもハイセンスでテクニカルですよね。

Hiro：冷たい感じの雰囲気というか、そういうのもずっと出したかったんですけど、それをすごく分かりやすくしたのがこの曲ですね。

ーかなり難しいことやってますよね？

Hiro：そうですね、難しいというかややこしいですね。ダブステップ的なギターのアプローチというか、DAFT PUNKの『TRON：LEGACY』というサウンド・トラックにインスパイアされてます。ギターでシンセのシーケンス的なのを表現したらどうなるかなってのがテーマです。で、普通のギターのリフにタッピングでシーケンス的に織り交ぜたりして、ギター1本だけど音数たくさん詰め込んで、いっぱい鳴ってるような感じを出したいなと思って作りました。弾くのはちょっと大変なんですけどね。

ーAnzaさんのヴォーカルも上手く絡んでますよね。

Anza：あまり力が入ってないというか、いい意味でラフに歌えた曲でもありますね。私もお気に入りです。
Hiro：リズムのシーケンスなんかもシーケンス・ループがありつつドラムがあって、割りとシーケンスもドラムとイーブンに近いぐらい出してるんですよね。今までやってこなかった部分を1番出した曲ですね。
Anza：ドラムのBatchもHPP加入前は同期があるバンドをやってたので、得意分野なんだろうなって思いつつ。
Anza：そもそもの話なんですけど、ドラムは全部打ち込みでやろうとしてたんです。

ーそうなんですか？それは意外でした。

Anza：実はレコーディングも2曲か3曲打ち込みで始まってたんですが、とんでもなくHPPらしからぬものになってしまって。いざ歌う時にカッチリしすぎて、教科書どおり歌わないといけない感じになりました。実験的なことをしてみたくて、やってみたんですけど、バンドには向き不向きがあって、私たちには打ち込みは合わないんだって分かったんです。実はそこからが大変な作業だったんですけど、新たにレコーディング・スタジオを探して、結局は前作をやっていただいたスタジオで同じエンジニアさんに録ってもらったんですけど、大変だったのはBatchで、元々は全部打ち込みだったから、生のドラムの練習をしていなかったので、2週間という限られた時間で、アレンジを変えたりしました。そういう意味では今回の功労賞はBatchですね。

ーBatchさんは打ち込みの予定だったものが急遽生ドラムに変更となった時いかがでしたか？

Batch：1ヶ月ぐらいはパソコンでしかドラムをクリエイトしてなかったから、“ここから叩くのか……”みたいな感じはありましたけど、その分余計なことを考えなかったから集中できたし、やるべきことはすぐ目の前にあったんで、そこまで悩むことはなかったですね。

ーTrack.6の「Miss You」はAnzaさんが尊敬しているというDEFTONESやTOOLに近い世界観を感じました。

Anza：全くそのとおりです。自分が影響を受けたテイストを1曲ぐらい入れたくて。前作にも「Rainy Stars」って曲があるんですけど、それに近いのかな。この曲が今作で1番のダーク・ソングかなって思ってます。

ーAnza さんのヴォーカルはDEFTONESやTOOLを思わせる部分もありつつ、やっぱりChino（DEFTONES）やMaynard（TOOL）とは違いますよね、男女の違いという部分ではなく。それよりも圧倒的な寂寥感を感じるんです。

Anza：あぁ、うまいこと言ってくれますね（笑）！ でもそのとおりです。

ー怒り続けるというよりはそこはかとない悲しみや寂しさというか。

Anza：そのとおりですね。実はこの曲の歌詞はUNITEDの横さんに対して書いたので……。すごくよくしてもらってたかたなので……。実は当初は全然違う歌詞だったんですけど、それが私の中では嘘くさくてリアルさを全然感じなくなってしまって。それで、歌詞を英語にしてもらう時にこういう感じにしたいってNarumiに無理矢理お願いして。
Narumi：ただただその時の気持ちをそのまま入れたんだよね。

ーそしてTrack.7の「Dance With Shadows」は、Track.6「Miss You」までの流れとTrack.8「Far Away」からの流れの間に、あえてひとつブレイクを置いたように感じたのですがいかがですか？

Hiro：今仰ったとおり、クッション的な役割の曲が必要だったので入れました。あまりにも曲のテイストの落差が激しくて、前半ノリノリ、後半堕ちていくみたいな感じになってるので、場面転換が必要になってきて。そういう理由があったのと曲自体レコーディングに入った段階で足りなくて、レコーディングに入った時にスタジオに置いてあったマンドリンで作ったものがこの曲なんです。なので着手したのが1番最後で、みんながドラムやベースや歌を録ってる間に空いてるスタジオに入って、自分のMacでマイク立てて録ってたんですよ。こういうテイストの曲が絶対必要だなって思ったんで。意外と伝統的なHPPサウンドになりました。

ーこの曲から次に繋がるTrack.8「Far Away」、Track.9「Left Alone」は寂寥感に加えて、怒り、憤りが加わっているように感じました。

Anza：「Far Away」はそこまでブチギレてはないです。この曲は今までありそうでなかった感じで、気持ちがあっち行ったりこっち行ったりしてるんです。三重人格ぐらいの感じですね。
Hiro：もう展開がぐちゃぐちゃなんで（笑）。もともとAnzaとNarumiが送ってきたデモに好き勝手にギター入れた結果がこの音なんです。

ーそれに引っ張られてヴォーカルもアグレッシヴになったんですか？

Anza：そうですね。あまり考えずに好き勝手にやれてこの曲が1番遊べました。AもBもサビもない曲なんで、気持ちの動くまま……ある意味舞台的というかミュージカル的ですね。ライヴでも面白いことになるかなって思います。

ー最後のTrack.11「In Dreams」は光が微かに見えてきてアルバムが終わる感じですね。

Anza：本当はそこに置きたくなかったんですよ。もうちょっと前の方、7曲目ぐらいに持ってこようかなと思ってたんです。ピアノの感じで終わるってありがちじゃないですか。でももうそこしかなくて。

ー最後にこの曲がくるのはすごくいいと思いますよ！歌詞は最後の最後でほんの少しだけ救われる感じもありますよね。

Anza：う～ん、完全に救われはしないですけど……。

ー“夢の中で”っていうのは悲しみもありつつですよね。

Anza：まぁ横さんのことですからね……。ハッピーではないですけど、リピートする時にまた1曲目に行くじゃないですか。その流れがなんかちょうどいいのかなって今は思っています。

インタビューの続きは激ロックウェブサイトをチェック!! >> GEKIROCK.COM

HEAD PHONES PRESIDENT
Disillusion
NOW ON SALE!!

LABEL：TONIC code / RADTONE MUSIC
GENRE：HEAVY ROCK
FOR FANS OF：DEFTONES, The BONEZ, NOISEMAKER

紅一点カリスマ・フェメイル・ヴォーカルの、Anzaを擁するHEAD PHONES PRESIDENTが2年ぶり4枚目となるフル・アルバムをリリース。4人編成となって初の作品である前作でポピュラリティに向き合いストレートなサウンドを鳴らした後ろだが、今作ではその方向性をさらに突き進めている。リズミックでダンサブルなTrack.1「The One To Break」やTrack.3の「I Mean It」がその代表的な曲だろう。またスラッシュ・メタルさながらに突っ走るTrack.2の「A New World」も過去の彼らにはないタイプの曲だ。とはいえ現代の流行に擦り寄るわけではなく、HPP特有のヘヴィ・ロック・サウンドとの絶妙なシンクロ具合はさすがである。個人的にはDAFT PUNKのサウンドトラックTRON：LEGACYにインスパイアされたというTrack.5「Wait」がおススメ。ダークな質感とテクニカルでハイセンスなギター・サウンドが無性に心地いい。 **村岡 俊介（DJ ムラオカ）**